

マーラー雑感（4）

根室市外三郡医師会
町立別海病院

やまうち おさむ
山内 修

交響曲第6番だけマーラーは、標題を「悲劇的交響曲」と付けました。初演後に削除しましたが、曲は80分以上かかる壮大なものです。今回は、この第6番をより身近に視聴できるように、三つのポイントから記していきたいと思います。

①カラヤン盤に異音？

映画「ベニスに死す」（1971）が公開され、マーラーの交響曲第5番のアダージェットが話題になりました。それに触発されてか1973年にカラヤンが第5番を発表、これが彼のマーラー初録音でした。その後第6番を発表（1975-77）するのですが、この盤に「不思議な音」が入っているとのこと¹⁾。よ〜く聴いてみると、ありました。CDで第4楽章の15分49秒と16分11秒あたりの2回です。演奏の後ろで、微かに「パサパサ」という音です。榊野氏は仮説を三点上げています¹⁾が、私はカラヤンがこの音に気付かずに聴き逃したと思っています。

②バーンスタインは3回？

この第6番には、変わった楽器が使われています。牛が首に下げるカウベル、開発間もないチェレスタ、そして巨大ハンマーなど²⁾。この巨大ハンマーは木製の太榫で、大きな木製の台を叩いて音を出します（床にある厚い板を叩くこともあり）。

第4楽章で使われるこの巨大ハンマーは、「ドスン」と運命の一撃として「悲劇的」を象徴するものです。マーラーは楽譜に最初5発書き入れていましたが、最終的に2発にしました。これを3発にして演奏するのがバーンスタインです。1発目はマーラー長女の死、2発目はウィーンを追われた悲哀、3発目はマーラー自身の死、というのが彼の解釈とのこと³⁾。CD（1988）では13分26秒、18分30秒、29分20秒あたりに聴けます。

ちなみに「バーンスタイン」のアクセントですが、バーにあるようです。映画「ティファニーで朝食を」の1時間38分ごろに、ヘプバーンが「バーンスタイン」と言っています。

③ラトルのモノは大きい？

ベルリン・フィルの首席指揮者を16年間務めたサイモン・ラトルが、2018年に退任しました。その年の6月19日と20日に退任コンサートが開かれました。曲目は「マーラー交響曲第6番」で、NHK-BSでも放送されました。ラトルは1987年に同フィルとCDを出していましたが、今回は円熟かつ老練な演奏が視聴できます。第3楽章までは、第4楽章

も順調に進みますが、物凄く巨大すぎる白木のハンマーが出てきます。通常舞台後方の端の目立たない位置でのものが、中央部に陣取っているのです。そこで大きくない人がそのハンマーを振り上げるので、後ろに居る女性の観客たちが笑いだします。私もビックリして唖然としてしまいました。

さて、この第6番で問題になるのは、第2と第3楽章のどちらをスケルツォにするかアンダンテにするかです。2003年に国際マーラー協会が判断を下しました。「第2楽章＝アンダンテ、第3楽章＝スケルツォ」です³⁾。しかし、私は逆の方がスッキリするし、最終（4）楽章への繋がりが良いように思われます。今でも指揮者によりまちまちの演奏です。

私の推薦CDはクルレンツィス指揮／ムジカエテルナ（2016）、BDではアバド指揮／ルツェルン祝祭管（2006）を挙げます。

「悲劇的」の副題が付くことの多いこの曲は、指揮者たちから「第6番は死一色」（ジンマン）、「フィナーレは破滅の楽章」（エッシェンバッハ）などの言葉があります⁴⁾。しかし、私自身は聴き終わった後に、何かスッキリしてヤル気が起きるのです。

角皆氏は「自分の生き方として、とことん頑張っていて、それで失敗してもいいじゃないか、という悟りのようなものを得られる曲」。土井氏も「6番は私にとっても元気になる曲ですね」と対談で語っています¹⁾。先のクルレンツィス盤のライナーノーツにも、「聴き終わったら、自分が以前よりも生き生きしているように、また、良くなったように感じる曲」との記載があります。

この曲をもっと若い時に知っていたかったと思うとともに、今の悩める若者たちに薦めたいです。

〈参考〉

- 1) クラシックジャーナル041「マーラーを究める」。
- 2) モーストリー・クラシック「マーラー」。2020年4月号。
- 3) 金聖響＋玉木正之著「マーラーの交響曲」。
- 4) 音楽之友社「マーラーを語る・名指揮者29人へのインタビュー」。

